京乙
10
316

日本紀私讀本

巻二之下

栗原柳庵
稿本

六

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』 請求記号 京乙-316

ガラス使用

日本紀私記　丁本

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号　京Z-316

ガラス使用

皇孫因奉豊吾田津姫則一夜而有身皇孫疑之
云、遂生火酢芹命次生火折尊亦稱彦火火出見尊
母誓已驗方知實是皇孫之胤然豊吾田津姫恨
皇孫不與共言皇孫憂之乃為歌之曰憶企都茂
幡陛尓幡譽戻耐母佐祢耐琉茂阿黨播怒介茂
譽播磨都智耐理譽煙火灼
添山北云曽褒里絶耶麻
秀起北云岐陀到屢
一書曰高皇産靈尊之女天萬栲幡千幡姫一云
皇産

武田
明治 44. 3. 31 購求

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

靈尊兒萬幡姫兒玉依姫命ヲ此神ト為天忍骨命
妃ト生兒天ノ杵火ノ杵ト買瀬ト
天ノ杵ト云ヒ天君ト云ヒ火ノ瀬ト云ヒ
天ノ起ト云ヒ
(八)一云勝速日命ノ兒ニ天夫君ト云ヒ火瓊ノ杵ト云ヒ是又一說ノ內ニテ異說ト知ヘシ
火瓊ノ杵ト勝速日命ノ兒ニ天忍穗耳尊ヲ生ミ給ヒ
姫ヲ丹舄姫命ト
云ヒシ於是
一云神高皇產靈尊ノ女栲幡千幡姫生兒火瓊
瓊杵尊ト申ス
一云天杵瀨命娶吾田津姫生兒火明命次火夜
織命次彦火ノ出見尊ヲ
の尊ヲ又吾田津さ
ハ吾田ヲ云処での姫
ヒ一書ニ云ヒ二人一時
誕生ヲ以テ云ふや
一書云云哉吾勝ノ速日天忍穗耳尊娶高皇產
靈尊之女天萬栲幡千幡姫為妃而生兒瀛天照
國照彦火明命是尾張連等遠祖也
此八字古寫本小字ニ作ル
ル然ニ舊事記天孫本紀ニ天照國照彦天
火明櫛玉饒速日尊亦名天火明命亦名天照國

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

照彦天火明尊亦云饒速日命亦名膽杵磯丹杵穗命と云此命長髓彦妹御炊屋姫を娶て味間見命を生と云饒速日命は神倭磐余彦火出見天皇と時を同くして天皇を助奉りし功臣なり天照國照彦天火明命と何か同しき洽名ふて櫛玉饒玉の六字は衍文と知へし火明命十世を尾治弟彦連と云大鵹鷲天皇の朝の人と云へり尾張連の祖も是尾張連の祖なり

次天饒石國饒石天津彦火瓊々杵尊天と云上を放詞國と云地小て下し意は上を富し下を富とを云ふ是次の八字は既ふ云へるを以て衍文とす

此神娶大山祇神女子木花開耶姫命為妃而生兒彦火々出見尊

兄火闌降命自有海幸此云五知一〇海漁獵の事を主領とるを以て云ふ

瓊々杵尊初曾峩の高千穂宮に遷りて。吾田の笠狭宮に遷らせ玉ひ彼の大山祇の女を妃とし玉ひ終に彼處に崩坐ましかい可愛の山陵を葬奉りし後の子火闌降命今小大隅の地主と治て称す曾峩郡東久村に大隅神社と云ふ是火闌降命を祀れる所なり

笠原郡國府郷宮内村鹿島神社は彦火々出見

尊を礼拝奉る什麼ら火ゝ出見尊の大宮處ゝ
ゝ今不体文ととゝ 然ら火ゝ出見尊 向国都島 高千穂宮
処なりとゝ
のとゝ 重久村ふたゝ 降命が譲ゆゑの
ゝへ 即ち 邇邇の後 坐處ゆゑ 火風
しかい其ゐ孫代代と領ゝ大陽陸摩の皐人と
せり称せゝととゝ

弟彦火ゝ出見尊 自有山幸。主領ゝ始兄弟二
人。相謂曰。試欲易幸。遂相易之。各不得其利。兄悔之。
乃還弟弓箭而乞己釣鉤。弟時既失兄鉤。無由訪覓。
故別作新鉤與兄。ゝ不肯受。而責其故鉤。弟愚之。即
以其横刀鍛作新鉤盛一箕而與之。
横刀ら西土乃剣ゝ我邦乃刀ら竪佩の器ゝらと
其をいく鉤ゝ造らいゝ詞を
設けゝのるゝゝ

兄忿之曰非我故鉤雖多不取益復急責故彦火ゝ
出見尊憂苦甚深行吟海畔
籐姓 阿多郡の海畔小童ゐ玉ゐ人ゝとも

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』 請求記号 京乙-316
ガラス使用

時逢鹽土老翁
前ふいとゆ
國勝事勝長挾の事あり。
（薩摩国頴娃郡宮田町村名の開聞神社の境内）
祀る所の
開門のみを
國主と云ふやと云ふ説もあれど
又多都比姫（即瀬神し宮とぞ）
ろ小今い國常立尊、大日霊貴、猿田彦、忍穂耳尊、
天穂日命、天津彦根命、活津彦根命、能野久隅命
田心姫命、湍津姫命市杵島姫命を祀る共に
古事記ふい塩椎小伝ふ所
しか非ず因の知鹽の字又假名ふるへし
レホツチやふ義を思ふよりシやい前の約なり
ホとそ潜の約ふれい前を祇潜を識をシホと
云其前潜を合せ判をツチと云ふ
横の舒ふ処ふ因て鹽土翁
（海潮の進むいシろ
海潮の引いたりムふて
ホまるとろ）

老翁問曰何故在此愁乎對曰事之本末老翁曰勿
復憂吾當為汝計之乃作無目籠内彦火々出見尊
於籠中沉之于海即自然有可怜小汀可怜此云
（麻師）汀此云

波麻於是棄籠遊行忽至海神之宮其宮也雄壕聳頽

臺宇玲瓏門前有一井

薩摩瀬戸郊宮十町村の中程に門神社の一鳥居

よりまつすぐに南へ三町八間ほどの森山あり其中に

石の築垣を周らし一井あり是を玉井と云海

神の宮なり

長の家の井もとゝ又云火出見尊橋の小戸

よりの宮

舟かりて山川湊まで渡らせ玉ひしより始まる

海舩の泊る処を冬ら宮邊とゝそより海神宮

の門まで今風一里あり

又いふ山川牛濃潟と

或いは揖宿郷多羅浦とも云ふ処か海辺より廿

その名なりとぞ多羅は海神又

玉

の御名の遠き如ふ洒落

女豊玉姫玉井の水を汲玉ひしとぞ

今浜祭の神酒千年酒を行ふ

倒れて舩一ツ損せしを

後も修理しとぞ

井上有一湯津杜榊枝葉扶疏時火出見尊其

榊下徒倚彷徨良久有一美人挹水入舩圀而去遂

玉鉾

來當汲水因擧目視之乃驚而還入白其父母曰有
一希客者在門前樹下海神於是鋪設八重席蔦以
延內之坐定因問其來意時彦火々出見尊對而情
之委曲海神乃集大小之魚逼問之僉曰不識唯赤
女比有口疾而不來固召探其口者果得失鉤
大小之魚い大小の漁人を知へ〳〵赤女い今の
鯛なりと云鉤鯛人そやらさやら〳〵を風〳〵
ろ〳〵いと然して鉤とりて容易かたき貌を表す
已而彦火々出見尊因娶海神女豊玉姬仍留住海
宮已經三年波處雖復安樂猶有憶鄉之情故時復
大息豊玉姬聞之謂其父曰天孫悽然數々蓋懷土
之憂乎海神乃延彦火々出見尊從容語曰天孫若
欲還鄉者吾當奉送便授所得鉤鉤與汝兄時則陰
呼此鉤曰貧鉤然後與之復授潮
滿瓊及潮涸瓊而誨之曰漬潮滿瓊者則潮忽滿以
此沒溺汝兄若兄悔而祈者還漬潮涸瓊則潮自涸

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

以此救之如此逼悩則汝兄自伏

開門神社ニ顕の瓊を窃ニ納め宝塔ニ蔵む

後の賢作ら大隅八幡宮ニ詣あり満玉いふ色洵玉い白し雑卵ゟ

及将帰去豊玉姫謂テ天孫ニ曰妾已娠矣當産不久妾

必ニ風濤急峻之日出到ニ海濱ニ請為我作産室相待

矣

海神宮ハ今の薩摩郡宮ノ浦十町村ニそなよる

大隅國の肝属郡北方村ニ姫養子ゟ又い笹尾と

云処ニあり茲ニ菁不合尊を玉依姫の養ひ奉る處ゟ

とぇ。ゟ特ニ尊ゟ深ゟふて樹木茂ゟ絶頂ゟ高十一尋ゟ

余周七十尋余の大岩ゟ其南方ニ深一丈

一尺余横三間ゟ尺余の穴ゟ其傍ニ清

水涌出ゟ乳汁ゟ如ゟ婦人ゟ乳泉ゟ如ゟ乳房ゟ點ゟ如

ゟ必故あるとゟ思ゟ落たるをゟい非ゟ此処ゟ

ゟ山深けれゟ汁急ゟ奥濱ゟ文処あるて今ゟ

奥殻多ゟ出ゟれゟい昔ゟ海濱ゟてや有けん豊ゟ

開海国よ之家工来之て青木令号を誕奉之る
へく思之ると語之て或い今日向之那阿賀
鵜戸浪なと共えかや又那阿賀河い龍の梵語なと
と知る常陸の鄰河川今ふ之渡之て後歸し地名
岐の那阿賀ふ海舶鎮護の靈神を崇祀之て國
思へい芝玉姫を彼女と思ひ混ま之しよと都
名をも之ふ名付しるれい今子伯と云ふ及え
矣

彦火ゝ出見尊已還宮

今の大隅薬原郡國府村宮内村の火宮ふと

一導海神之教 今海門の地の領主ふ玉姫のふ
被危困乃自伏罪曰従今以後吾将為汝俳優之民
請施恩活於是隨其所乞遂赦之其火闌降命即吾
田君小橋等之本祖也 此十六字ふ古字ふ
日本紀一書ふ諸隼人等の祖と是とふ
諸隼人と云ふ大隅隼人姶羅郡少領加志留多利
天平元年 大隅薩摩二國隼人 續日本紀
利志佐ふとをふへ 紀運録ふ年
人祖と云

其隣之口分ふ有ふ城 造塁在于要峰ふ蓋 火風烽令ふ之ふ称ふ世居 薩摩の伊地知季安の著ふ考ふ今ふ於都 曽於郡尚有ふ社名隼人塚在於御ふ止神社西数百歩而祀其先神火闌命於同社又大隅郡社又

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

後豊玉姫、果如前期、将其女弟玉依姫、直冒風波、来
到海邊、遂臨産時、請曰、妾産時、請勿看之、天孫猶
不能忍、竊往覗之、竟玉姫方産化為龍而甚慙之曰
如有不辱我者則使海陸相通、永無隔絶、今既辱之
将何以結親昵之情乎、乃以草裹児棄之海邊、閉海
途而径去、矣故因名児曰彦波瀲武鸕鷀草葺不
合尊、後久之彦火火出見尊崩葬日向高屋山上陵
豊玉姫之妹玉依姫、是為神日本磐余彦尊之母
也、

一書曰、彦火火出見尊、娶海神豊玉姫、為妃、
遂留住海宮、三年之後、彦火火出見尊、憶念
兄火闌降命、発帰本土、豊玉姫、謂夫君曰、妾已
有身矣、当産天孫之胤、而海中、不可産育、故
来就君、請為我、於海辺、作産室以待之、
豊玉姫、依其言、出到海辺、作鸕鷀草葺為
屋、是時、産室未葺竟、而陣痛並動、不堪忍
産、入彼屋中、時豊玉姫、謂夫君曰、凡異国人、
不可従情、当産之日、願勿看妾、今妾不顧
情、来就君、而見辱、甚可恨、乃取草裹児、
即以生道、棄海辺、而閉海途、径去、

一書曰、豊玉姫、将生時、謂彦火火出見尊曰、
妾今夜当産、請勿来臨、彦火火出見尊、不聴
猶往窺之、豊玉姫、方産化龍、甚以為恥

出〻て〻ゑ少〻ゆ〻や〻ゐ産来屋〻こ〻ゝ〻い〻ゐ〻ゐ〻て
少〻と〻る〻ゐ〻キ〻タ〻ゐ約〻ゐ〻て〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ葺不合〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ
産室の屋をいふ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ

火出見尊於籠中投之于海
一云以無目堅間為浮木細繩繫著火出見
尊而沉之 所謂堅間是今之竹籃也 于時海底自有可怜小汀
乃尋汀而進忽到海神豊玉亮之宮也城闕
崇華樓臺壯麗門外有井井傍有杜樹乃就樹下
立之良久有一美人容貌絶世侍者群従自内而
出將以玉壺汲水仰見火出見尊便以驚還而
白其父神 神字易長の字 曰門前井傍有一

本篇ハ無目籠ト記サレ、一ノ一書ハ大目麁
籠ト記シ、二ノ一書ハ無目堅間ト注ク、ソノ
一書ハ無目堅間小船ト注ク、古事記ハ无
間勝間ノ小船ト記シ、熟思ルニ、無目籠ハ
詞足ハシ、大目荒籠ノ、今ク誤ルニヤ、若シ
無目ハ、板ノ合目ヲ、堅間トハ、片身
ヲ同ク詞ヲ入レ、堅キ木ヲ空メキ、海ヲ
タヽヨヘタヽヨヘ、橡ト云ヘル、堅間トヨム

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

貴客骨法非常若従天降者當有天垢後地来者當有地垢実是妙美之虚空彦者歟於是琴玉姫遣人問曰客是誰者何以至此一書云琴玉姫侍者以玉瓶汲水終不能満府視井中則倒映人之笑歟因以仰観有一銭神一倚於杜下故還入白其王火々出見尊對曰吾是天神之孫也乃遂言来意時海神迎拝延入慇懃奉慰因以女豊玉姫妻之故留住海宮已経三載嬉遊忘帰遂以

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316

ガラス使用

火出見尊數有歎息豐玉姬問曰天孫豈欲還故
鄉歟對曰然豐玉姬即白父神曰在此貴客意常
欲還上國海神於是總集海魚竟問其鉤有一魚
對曰赤女久有口疾或云赤鯛是之far故即召赤
女見其口者鉤猶在口便乃出之乃以授彦火火出
見尊因教之曰以鉤與汝兄時則可詛言貧窮
本飢饉之始困苦之根而後興之又汝兄洛海時
吾必起迅風滔濤令其沒溺辛苦死於是乘火

出見尊於大鰐以送致本鄉一鰐魚白譬之如
約慎勿悔矣言訖乘彼鰐魚以隨波路如期
送也一云鰐魚者和邇也

先是豐玉姬從容語曰妾已有身矣當以風
濤壯日出到海邊請為我造產屋以待之
妾必來也於是豐玉姬果如其言來至謂火火出
見尊曰妾今夜當產請勿窺之火火出見尊不聽
猶窃往窺之豐玉姬方產化為大鰐而匍匐
委蛇即驚而遠去

是後豐玉姬久不來出見尊知其不來也
乃取草為舟渡海欲到其國而陸路絶不可
通復不知所由於是徒行海畔嗟嘆無已
時有一感之士出自海原忽然而至自稱
名曰鹽土老翁乃問曰君是誰人何故患
此處而嗟嘆耶出見尊具言其事且曰吾
欲往訪海神之宮而無船檝之便不知何
由而達老翁曰勿憂吾當為君善計即
為造無目堅間之小船推載彼舟而教之
曰吾推此舟則汝乘之如隨我所為而行
必得至海神之宮矣於是出見尊如其言
乘小船隨其所推而往忽然之間自到其
處

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

…キルヲ以テ火ヲ切テ析テ…
…ヲ…ヲ…ヲ…ヲ…
…ヲ…ヲ…ヲ…ヲ…
…ヲ…ヲ…ヲ…ヲ

高民喪ニ中古以来有ニ喪想一
膳ニ真魚一大者如ニ鯷細鱗一長口時
即急召至探ニ其口一者呼失之鈎鈎立得於ニ是海神
海漁人の長なり
制曰汝口女従ニ今以往一不ニ得呑一餌又不
得預ニ天孫之饌一即今ニ口女魚呼ニ不ニ多御一者此
其縁也
及至ニ彦火一出見尊将ニ帰之時海神白言
今者天神之孫辱臨ニ吾處一中心欣慶何日忘之乃
以思則潮溢ニ瓊思則潮涸之瓊副ニ其鈎一而奉ニ進
之曰皇孫雖ニ隔ニ八重之隈一冀時復相憶而勿ニ棄置一也
海漁人乃長ニ跪ニ蒼龍中國乃云ヘリ別ヲ八重
隈ヲ云ヘルナリ
因教之曰、以ニ此鈎一與ニ汝兄一時、則称ニ貧鈎一、
鈎、言訖以後手投ニ棄與之一、勿ニ以向一投、若兄起ニ怨
有ニ賊害之心一者則出ニ潮溢瓊一以漂ニ溺之一若已至ニ苑
苦一、永啓者則出ニ潮涸瓊一以救之如ニ此逼悩自ニ帰臣
仗時彦火ニ出見一受ニ彼瓊鈎一帰ニ来本宮内の
一依ニ海神一教先ニ与ニ其鈎一與ニ兄一、怒不ニ受故弟生

潮溢瓊則潮大溢兄自没溺困請之曰吾前事汝
為怒僕殉死救活弟出潮涸瓊則潮自涸而兄還
平復已而兄改前言曰吾是汝兄如何為人兄而
事弟耶弟時出潮溢瓊兄見之登高山則潮亦
没山兄緣高樹則潮亦没樹兄匐匍途無所逃去
乃伏罪曰吾已過矣從今以往吾子孫八十連屬
恒為汝俳人一云狗人のごとくせむ
還出潮瓊則潮自息於是兄知弟有神徳遂以伏

事其弟是以火酢芹命苗裔諸隼人等至今不離
天皇宮墻之傍代吠狗而奉事者也
世人不償失鉤此其緣也
一書曰兄火酢芹命能得海幸故歸海幸兄弟
火出見尊能得山幸故歸山幸兄則無復
兩瓫失其利

潮溢瓊潮涸瓊蓋潮の溢涸の時刻を火酢芹命の知ましゝ
給ひしとぞ

弟則雖逢風雨其幸不惑時兄謂弟曰吾試欲與汝換幸弟許諾因易之時兄取弟矛矢入山獵獸弟取兄釣鉤入海釣魚俱不得利空手而皈兄即還弟弓矢而責已釣鉤時弟已失鉤於海中無因訪獲

二尊乃以瓊々杵尊の御子ニ尋常の人ニ云大隅へから谷曽咩那の住人ろ火闌命い海ヲミ人を司サトヲ火ニ出見命い獵人ヲヤマノサチヒトを司ツカサドるも

小ヲ海幽命海人を率ヒテ漁獵の時潮汐の時刻ふ違ハて風浪ニ困苦しむるとも

火ニ出見尊の給ふ山中ふの時刻の雖なり因て此挙ふ及ひしと

故別作新鉤數千與之兄怒不受急責故鉤ヲ云ニ

是時弟往海濱低徊愁吟時有川雁嬰罻困厄即起憐心解而放去須臾有塩土老翁来乃作無目堅間小船載火ニ出見尊ヲ推放海中則自然沉去ヌル

忽有可怜御路故尋路而往自至海神海長之子
是時海神自迎延入乃鋪設海驢皮八重使坐其
上兼設饗百机以主人之禮而供奉焉 一云頃吾兒来語曰天孫夏降
海濱未審虚実蓋有之乎 彦火々出見尊具申事
之本因留息焉海神則以其子玉姫妻之遂
纏綿篤愛已経三年及至将返海神乃召細問探
其口者即得鉤焉於是進此鉤于彦火々出見尊
因奉教之曰以此與汝兄時乃可称曰大鉤頓貧鉤
鉤貧鉤癡騃鉤言訖則可以後手投賜已而召集
鰐魚問之曰天神之孫今當還去你等幾日之内
将作奉致浦次の日次を問ふ時諸鰐魚各隨其長短
定其日數中有一尋鰐自言一尋八尺大鰐と云へからん
一日之内則可致焉故即遣一尋鰐魚奉送焉
顕姫郡より揖宿の山川津と経て大隅の宮
内より浦次に一尋ばかり次第に小さくなるなり

復進潮滿瓊潮涸瓊二種宝物仍教用瓊之法又教
曰兄作高田者汝可沈溝田兄作溝田者汝可沈高
田海神共誠奉助如此矣時彦火々出見尊既悉
一遵神教依而行之弟時出潮溝瓊即兄奉手溺困
還出潮涸瓊則休而平復其後火酢芹命日々襤褸
而憂愁曰吾已負矣乃跪伏於弟前是尊玉姫謂天
孫曰妾已有娠也天孫之胤豈可產於海中乎故前
產時必就君處必為我造屋於海邊以待妾所
即也故彦火々出見尊已還鄉即以鸕鷀之羽葺
為產屋未及合豈玉姫自馭大龜將女弟玉
依姫光海來到大龜小大舟之小者亦如之深
黑色而甲上有文小龜亦如之深黑色而甲上有文
ヘとは又カメとは龜の字なり海とは又舟を指したり
姉妹以下侍女數多の義なり
方急由此不待菖合徑入居焉已而從容謂天孫
曰妾方產請勿臨之天孫心怪其言竊視之則化
為八尋大鰐而匍匐委蛇乃慙恨既児

生之後天孫就而問曰兒名何稱者當可乎對曰
宜歸尊波激武鸕鷀草葺不合尊言訖乃涉海徑
去 児の名を奈何の付うと欲するに初めて于時彦火々出見尊乃訣
之曰欲企都鄧利。おきつ神路かよて・沖の路とえとをかよりの約チ
軻茂豆句志磨尓カモツクシマニ・上州に・クシマ・コル約ク・意か沖路
そろいかう上州らたふ和我謂祢志佐ていわくしも
凝りタ烈る島ふとえ義も
伊茂播和素邏珥譽能俗のおもふ詞かそうだよのう不志ヨノーやおも今も
こうたよのうとえとおるしこ 掾鄧駅鄧母コトコら児處もトモハ乳母湯母
飯噌湯坐等をでゝ 亦日彦火々出見尊取婦人
となり
為乳母湯母及飯噌湯坐凡諸部備行奉養焉
于時椎用他婦以乳養皇子焉此世取乳母養児
之縁也是後豊玉姫聞其児端正心甚憐重欲復
歸養於義不可故遣女弟玉依姫以来養者也
玉依姫は一人おあらへ御衣を思ひ
魂寄の義おれい今え乳の合た姫と知へ
于時芸玉姫命寄玉依姫而奉報欧曰阿輌娜磨

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

比訶利播登比鄧播伊珮耐企頊我參賜比志多輔柘勾阿利計利

豊玉姫海人長の女なれいと難くしかと思い其所生も亦いとなり

出見尊の光儀の高き故は児の端正かよくといへるも

稱曰擘欺海驢此云美知浪縻鈎此云須々能美賜

ナケ欺と云義い五小相賞美て揚云々を

云ヒ欺ニくく又句卅一字も紀朝臣何端

ニ慈順如儀の体なくと同も

一書曰見火酢芳命得山幸利第火折尊得海幸利云々弟愁吟在海濱時遇鹽筒老翁々問曰何故愁若此乎火折尊對曰云々老翁曰勿復憂吾將計之計曰海神所乘駿馬者八尋鰐也是謹其鰭背而在橋之小戸

薩摩國小おく傳ふ今日向國諸縣郡末吉郷御南郷村四ヶ大内村中内村横村と三村なるを合せて一村とせしと云上古都小槵原と云処あり自然と今の槵の内ニ

多し。廣島より巽の方へ十六里あまり此より東
と都城（今ハ）（つ）（ミやこのじょう）即伊弉諾（イサナ）（ナ）尊の旧都にて瓊々杵（ニニ）（キ）尊
の高千穂宮も是処也。小戸（ヲド）神社（穢）
して伊弉諾尊を祀る神社四本あり小戸池（ヲド）あり
今も水涸（カレ）（風）ても十三間許（バカリ）池中より清泉涌出（ワキイデ）て
四時増減あり。婦人此泉を飲ば安産をして胎
月あり。糸状（イトのごと）くして此清泉を掬飲（すくいのむ）もの多し。又神
社より丑の方廿八町山続（ヤマツヾキ）の内一の峯を橋嶽

と云。此谷より流れ出る水（ここより）をかくも中川（なかがわ）
川（かわ）の源（みなもと）の深（ふか）き事（こと）。火闌降命（ホノスソリノミコト）の居処（いどころ）と云。
大隅薬師の宮内の海（うみ）をかくも近（ちか）き遠（とお）の者（もの）も
（ハダカ）（ゴ）（ゴ）
裸（はだか）にて見（み）べからず。頴娃（エイ）小住（コズミ）る海岸（うみぎし）の乗馬（のりうま）名（な）い
（然（しか）るに有（あ）る）
八景（はっけい）と云（いう）が高千穂（たかちほ）の内橋（うちばし）の小戸（おど）へ来（き）て
（ゴ）
居（い）ると申（もう）して下（ゲ）坐（ザ）れば是（これ）別而（べつして）吐（ハ）して
見（み）まくやうとやたとえて難背（タテ）立（ガタ）い厩
（ケハ）
ふ極（きわ）めて人（ひと）を厩（うまや）の傍（わき）に牧（まき）飼（かい）とぞ

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

吾當與彼者共策乃將火折尊共往而見之橋上
ゟ下へ
ま
す
て
馬
の
別
當
是
時
鰐
魚
策
之
曰
吾
者
八
日
以
後
ま
ゐ
ら
う
方
致
天
孫
於
海
宮
八
日
と
限
る
居
用
事
あ
る
小
永
く
久
敷
日
爰
小
事
仕
舞
て
後
からて
い
ゐ
ま
す
と
云
ふ
小
汝
唯
我
王
之
駿
馬
一
疋
鰐
是
為
一
日
之
内
必
奉
致
為
へ
一
日
ハ
不
日
と
云
義
と
云
へ
り
故
今
我
既
而
使
彼
出
来
爰
小
我
と
云
ハ
八
尋
鰐
ハ
爰
小
居
る
あ
ら
ゆ
る
用
あ
る
に
依
て
則
ち
彼
を
案
内
者
と
して
海
彼
へ
渡
ら
ん
と
欲
ふ
ゐ
ま
す
と
云
ふ
ことを
宜
乗
彼
入
海
彼
へ
渡
ら
ん
と
欲
ふ
ゐ
ま
す
と
云
ふ
ことを
入
海
之
時
海
中
自
有
可
怜
小
汀
浦
伏
ふ
うち
自
然
と
云
ふ
義
と
云
へ
り
便
よ
さ

路
あ
る
へ
し
と
云
ふ
ゐ
ま
す
と
云
ふ
ことを
可
怜
小
汀
ハ
よ
ろ
し
き
手
前
ろ
と
云
ふ
ことを
云
へ
り
侍
者
の
水
汲
か
出
し
ゐ
ま
す
と
云
ふ
ことを
ウ
ケ
キ
ノ
ハ
ヤ
ト
と
云
へ
り

隨
其
汀
而
進
者
必
至
我
王
之
宮
之
門
井
上
當
有
湯
津
杜
樹
宜
就
其
樹
上
而
居
之
言
訖
即
入
海
去
矣
故
天
孫
隨
鰐
所
言
留
居
相
待
已
八
日
矣
時
有
一
玉
娚
侍
者
持
玉
鋺
汲
井
水
見
人
影
在
水
底
酌
取
之
不
得
因
以
仰
見
天
孫
即
入
告
其
王
曰
吾
謂
我
王
獨
能
絶
籙
今
有
一
客
神
閽
之
容
儀
復
遠
勝
海
神
矣
日
本
紀
編
ゟ
ろ
之
床
の
説
あ
ゐ
ゆ
ゑ
ゐ
ゐ
ゐ
ゐ

久
々
方
有
一
尋
鰐
来
而
入
海
故
隨
前
小
尋
鰐
と
云
ふ

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316
ガラス使用

於是天孫於邊床則拭其兩足於中床則擤其兩
手於内床則寛坐於真床覆衾上三床之上
皆施五色之絁而人物不見唯聞其聲如
貴人之稱大低かくを有けるほの知是天神之孫瓊々杵尊の降ると知たる
海神乃赤女口女問之時口女自口出鈎而奉焉
赤女即赤魴也口女即鯔魚也時海神授鈎竟火々出見尊因教
之曰還兄鈎時天孫則南言海生ち八十連属之
裏貧鈎狹々貧鈎言訖三下嚥與之又兄入海釣

時天孫宜在海濱而作風招風即必蚘則吾起
瀛風邊風以奈波溺惚火折尊功某具導海永教
致之乃兄釣之日弟居濱而嘯之時迅風忽起兄則
溺苦無由可生便遥詬才曰海火居海原必有吾
術救之若活我者吾生児八十連属不離汝
ゝ垣至前為俳優ゝ民也於是弟嘯已停而風亦
還息故兄知弟徳欲自伏辜而弟有愠色不與共
言於是兄着狭稚尊以緒塗掌塗面告其弟曰吾汚

自如此永為汝例優者乃拳足踏行学其溺苦之
壯初潮漬足時則為足占至膝時則拳足至股時
則至臍(ホソモトホリ)時則拳(アケテ)手(ソノテヲ)掬(ムスブ)自(ミヅカラ)飲(ノムニ)及今曽無廃絶先是妾玉姫
出来前海時法穿孫曰云々皇孫不従妾玉姫大
恨之曰不用吾云令我屈辱故自今以往妾奴婢
至君處者勿復放還君奴婢至妾處者亦勿復還
是戸令以化外奴婢自来投国者悉放為良之

云根本之知へし海長の奴婢ふてし皇孫の
民とおれい良人こ皇孫の奴婢ふてし海長
の許のまれい海長の民もしそこ
遂に真床覆衾及草裏(ツヽミ)甚児置之波瀲(ナギサ)即入海去
矣衾と草(カヤ)を裏(ツヽミ)波瀲の産屋(ウブヤ)
ふ置て船ふ乗頸娃へ自
飯(イヒ)もしし 此海陸不相
通(カヨハ)ぬ縁也一云置児於波瀲者非也妾玉姫命自
抱而去(イヌ)頃(シバラクアリテ)久(ヒサシクアリテ)し(ノチ)曰ク天孫し乳(ウミ)不宜置(オク)ヶ海中
海人の地ふ置よりとて 仍使玉依姫(タマヨリヒメ)特之(コレヲシテ)送出焉 初妾玉姫

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』 請求記号 京乙-316
ガラス使用

別去時恨云既切故火析苧紐其不可復舍乃有
茗荷 故已見上 八十連屬 此云 於保素豆岐 俗 掬掌 此云 陀瓢 盧瓮須 也
彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊 八尊 其姨玉依姫為妃生
彦火瀲命次稲飯命次三毛入野命次神日本磐余
彦火火出見尊 凡生四男 久之 彦波瀲武鸕鷀草葺
不合尊崩於西殿 云々 因葬日向吾平山上陵
西殿之宮 此云 与委 乃 高千穂宮 此云 多加知 穂宮 也
陵 前云 美
一書曰先生 彦 又漸命次稲飯命次三毛入野命
次 狭野尊 亦號神日本磐余彦尊 狭野者 是年
少時之號 也 後 撥 平天下 奄有八洲 故謚 曰
神日本磐余尊
今日向國諸縣郡高原 此云 多加波羅 之西 有
地名 曰 蒲 田 村 佐野 是也
云 此小 狭野神社 之 又 玉 依姫 之墓 並在
尊を祀り奉るとぞ 狭井 河 よこそ 麑島 より北
小南 の 十六里とぞ 九月 八日より 廿九日 迄

（葺不合尊の庚午年
沈祭し、その神日本磐余彦尊
（葺不合尊の甲申の年、日嗣のみことをうけ給はりて
丁秋野尊と申せしが、又は
日本磐余彦尊と奉り平治物語を始めとして
平津姫家よりかくれなひしが、数家と渉墓ら
れしとや

一書曰先生人決命次三毛野命次稲飯命次磐
余彦尊亦號神日本磐余彦火火出見尊
一云曰先生矣又決命次稲飯命次珠日本磐余
彦火火出見尊矣稲飯命次三毛入野命
四種の一書の内、この一書の内、この一書は本第と合く同し
二の一云いふ毛入野命を二男とし余い同
三の一書は磐余彦尊を三男としこの一云
いふ二男とし

日本書紀巻第一　私読本終

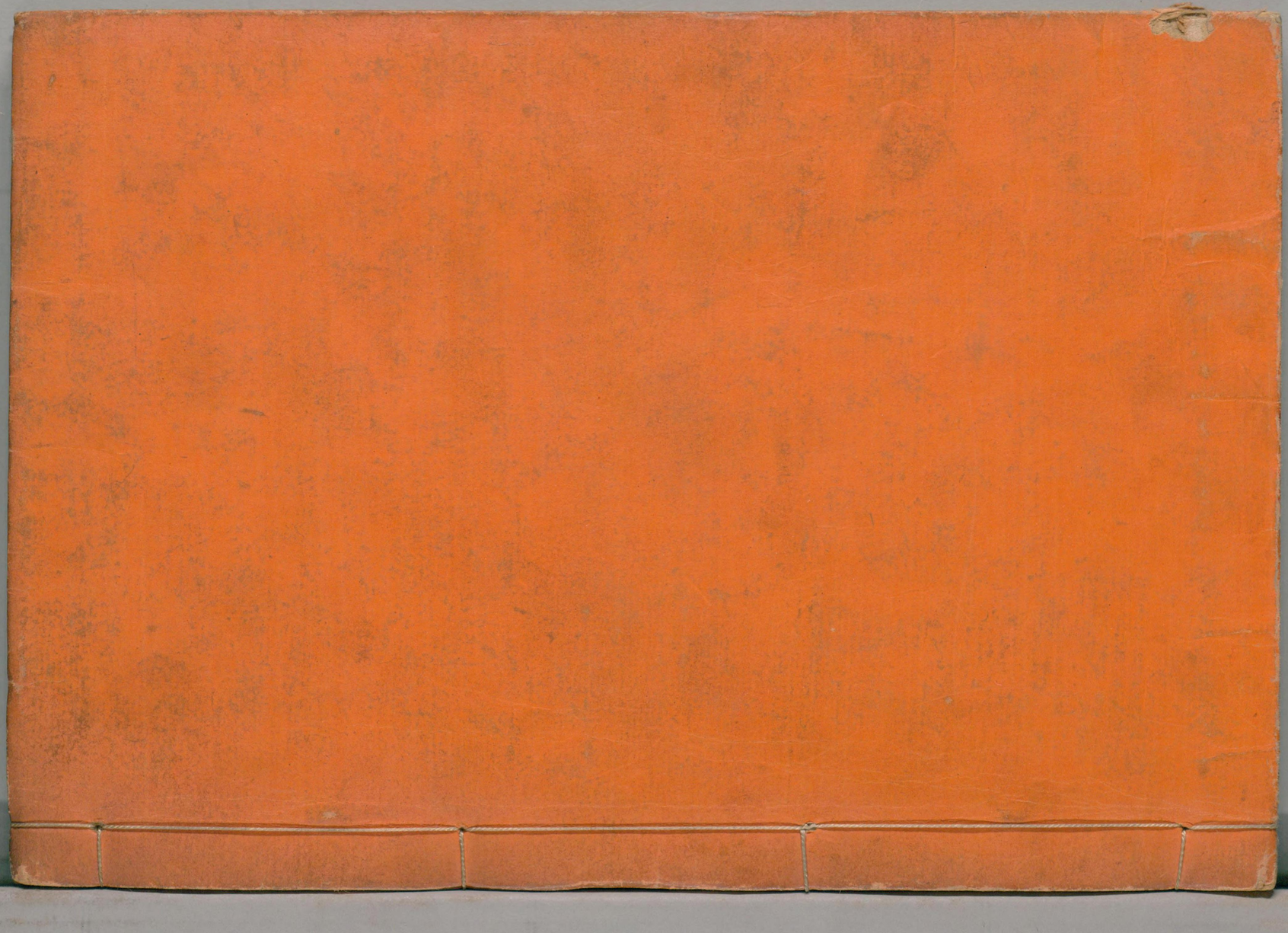
京乙
10
316

元治元年六月廿七日於蔀列藏児島
寓舎苧庵

又樂閑人

国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316

ガラス使用



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本紀私読本』　請求記号 京乙-316